

会津地方における仕事着の名称をめぐって

——特に山袴を中心に——

Naming System of the Work Clothes in the Aizu District, Fukushima Pref
: Specially on the *Yama-hakama* worn in a Mountain Village

佐々木 長生
SASAKI Takeo

要旨：民具名称のなりたちについて、自然環境および歴史的背景からの多様性の一例として、会津地方の山袴の名称を取り上げる。調査対象地は、福島県南会津郡只見町の民具名称を中心に、会津地方と隣接する新潟県魚沼地方を主な範囲とする。また、民具名称の歴史的背景については、貞享元年（1684）の『会津農書』や翌年の会津各地の風俗帳、文化4年（1707）の風俗帳、紀年銘のある農耕図絵馬や農書類に描かれた絵画資料を分析資料とする。新潟県魚沼地方の天保7年（1836）に著述された鈴木牧之の『北越雪譜』の記述と、併せてそこに描かれた絵図も比較資料として用いた。一方、民具としての資料としては只見町所蔵の重要有形民俗文化財指定「会津只見の山村生活用具と仕事着コレクション」（2333点）や、会津民俗館所蔵の福島県指定重要有形民俗文化財指定「会津の仕事着コレクション」（476点）なども資料として用いた。特に只見地方の民具については、『図説会津只見の民具』を中心に使用方法等を写真で示し、『北越雪譜』に描かれた民具の使用風形や形態の比較資料とした。

以上の研究方法から、近年まで着用されてきた会津地方の仕事着姿、「ジバン（上衣）にサルッパカマ（下衣）」という一般的な名称のなりたちについて、その民俗的・歴史的な視点から考察することが本稿の目的である。特に、サルッパカマと呼ばれる山袴については、会津平坦部での名称である。一方、大沼郡の山間部から南会津郡西部地区ではユッコギ・カリアゲユッコギ、またはホソッパカマ等の名称が一般的である。ユッコギは「雪こぎ」からの名称とみられ、深雪地方に存在するとするという仮説もある。サルッパカマの名称も文化4年の『熊倉組風俗帳』（喜多方市熊倉付近）等に初出して、その30年ほど前から着用され始めたところである。それ以前の農耕図には、山袴類の着用は確認することができない。このように民具名称を歴史的に確認できることは、民具名称のなりたちを考えるうえで、きわめて有効な資料であろう。会津地方の山袴の名称、サルッパカマやカリアゲユッコギはその一例である。

▶キーワード しごとぎ やまばかま 仕事着 山袴 モンペ

1. 民具名称の多様性

「所変れば品変る」という譬えがある。反対に、「品同じでも名称が変わる」という場合もある。民具の名称には、この譬えが多くあてはまるのではなかろうか。雪踏み用の大きなカンジキを、福島県南会津郡只見町付近ではツルカンジキとかツルと呼んでいる。新潟県魚沼郡塩沢町付近では、スカリと呼んでいる。このカンジキは福島県内では、新潟県に接

する南会津郡只見町と南会津町、大沼郡金山町から三島町の「丈余りの雪」と呼ばれる豪雪地帯にのみ分布している。むしろ新潟県側からの伝播とみられる。ツルカンジキやスカリの名称は、すでに文化・天保期の史料からもその存在がうかがえる。

文化4年(1807)の現在の福島県大沼郡三島町付近の『大谷組風俗帳』には、「鶴」および「鶴かんじき」とあり簡単な図まで添えられている。

一大雪にて通路難_レ成時はかんしきをはく、又雪はかまと云を着て自由仕候、大雪には指渡式尺余りに木を丸く曲て所持し、くつに結対て先達_而雪をこぐ、是を鶴と申候、其跡を常ノかんじきにて歩む事あり、鶴かんじきの図ヲ顕ス

また、天保6年(1836)の鈴木牧之の『北越雪譜』には、会津地方のツルカンジキに相当するスカリについて、その使用方法と解説と図まで記載されている。

すかりはたて二尺五寸より三尺余、横一沢二三寸、山竹をたわめて作る。

かじき・すかりの二ツは冬の雪のやはらかなる時ふみこまぬ為に用ふ。はきつけぬ人は一足もあゆみがたし。なれたる人はこれをはきて^{けもの}獣を追ふ也。

『北越雪譜』と『大谷組風俗帳』により、「鶴」および「鶴かんじき」と「すかり」の記載を照合すると、形態はほぼ同形である。塩沢地方は大谷付近よりはるかに積雪も多いので、一尺余り大きくなろう。現存するツルカンジキを見た場合、雪の多い只見町のは少ない三島町のものより五、六寸ほど大きい。ツルカンジキは主に雪道作りの雪踏みに用いたという。『北越雪譜』でいう、「これをはきて^{けもの}獣を追ふ也。」と同様に只見地方では、深雪期のアオシシ(ニホンカモシカ)猟にツルカンジキを使用していたようである。

塩沢と只見とは、それほど距離が離れていない地域で、このように名称が違うことに疑問が生れる。会津地方でいうツルは『北越雪譜』の図のように、カンジキの先に縄を付けて、「吊り上げる」ように使用するものと推測される。一方新潟地方のスカリについては、不明である。私は、カンジキの足を載せる部分(乗緒とも呼ぶ^{のりお})が、網状になっているからであろうと、推測したい。

海女や海士が海中に潜り、鮑など採取した貝を入れる網状の袋をスカリと呼ぶ。また会津地方では縄で籠状に編み上げた背負い袋をスカリと呼んでいる。貞享2年(1685)の『猪苗代川東組萬風俗改帳』には、「一すかり 是ハ女并子共野粮馬ノ飼草取入せおい参候人物」とあり、簡単な図が添えられている。貞享元年の『会津農書』の農具の記載(寛延元年<1748>写)では、「透羅^{すかり}——万の野菜を入具。縄を以作ル。」とあり、「透羅」という文字をあてている所に注目される。すなわち透^{すき}通るように、すき間がある形態を示している。藁縄やシナ縄・ブドウツルなどで、すき間なくびっしりと編み腰に着けたり背負う籠は、会津地方ではコシコ(腰籠)とかデコ(手籠)と呼ぶ場合が多い。『会津農書』では、「腰籠^{コシゴ}——小籠に編て腰に付、万の葉を入具。縄を以作ル。」とある。

次に、『大谷組風俗帳』に記載された「鶴」および「鶴かんじき」について考えてみたい。只見町旧田子倉には、カンジキについて八幡太郎義家にまつわる伝説がある。大雪に進軍

をはばまれた義家軍の前に、一羽の鶴が木の枝をくわへて、それを雪の上に落とし降り止った。それを見た義家が木の枝を曲げ、カンジキを作って敵軍を討ち果たしたという。この伝説に因むかどうか不明だが、「鶴かんじき」と鶴について、文化4年当時の伝説の存在が、「鶴」という文字を当てたものか推測にすぎない。

カンジキは、雪中に埋まらないよう履くことが、本来の目的である。この機能から湿田の耕作に使用する田下駄にも、カンジキ型のものが見られる。新潟県内ではカンジキと呼ぶものもある。郡山市中田町では湿田の稲刈りに用いる輪カンジキ型の田下駄を、ガンジキと呼んでいる。只見町のように稲刈り用の田下駄はなく、湿田の稲刈りに新雪時に履く丸カンジキを用いたという。田下駄の名称としての「かんじき」は、近畿地方にもあることが農書からも見られる。

このように、民具名称には様々な要素が何層にもからみあって、今日に継承されていることが、ツルカンジキの一例からもうかがえる。形態はほぼ同じでも、使用する地域の条件から若干の違いが生じたり、また製作方法や材質などからも名称の違いが生れてこよう。ウリハダカエデを喜多方市付近など会津北部地方ではオオカと呼び、只見町など会津南部地方ではイイツクと呼ぶ。その樹皮を編符あみふにして作った蓑を、会津北部地方ではオオカミノと呼び、会津南部地方ではイイツクミノと呼んでいることなども、その一例である。

このような地域差による民具名称の相違について、会津地方における仕事着、特に山袴を中心に見てみたい。なお、名称の変遷や歴史的な位置づけについては、貞享元年の『会津農書』や宝永元年(1704)の『会津歌農書』をはじめ、貞享2年および文化4年の風俗帳などを資料としたい。また、比較資料として新潟県魚沼地方の鈴木牧之著『北越雪譜』等も扱いたい。



写真1 奥会津のツルカンジキ(只見町:写真左)と文化4年『大谷組風俗帳』に記載された「鶴」と「かんじき」



写真2 ツルカンジキでの雪踏み(只見町)



写真3 『北越雪譜』に描かれた「^{すがり}縫り(スカリ)を穿きて雪道を行く図」
『日本庶民生活史料集成』第9巻より



写真4 『北越雪譜』に記載された「雪中歩用の用具」
『日本庶民生活史料集成』第9巻より

2. 『会津農書』にみる仕事着の名称

『会津農書』は、貞享元年（1684）若松城下に近い幕内（現在の会津若松市神指町幕内）の肝煎佐瀬与次右衛門によって著述された農業技術書である。会津という広大な面積の農業技術を山間部の「山郷」と平坦部の「里郷」とに分け、「郷談」と呼ばれる旧慣習と与次右衛門自らの体験を批判的に観て実験し、報告する形で著述したもので、近世会津の民俗をも多く記載した農民による農書である。与次右衛門は『会津農書』の内容を農民たちにわかりやすく覚えやすいようにと、その内容を歌でつづった『会津歌農書』を宝永元年に著述している。また同年代には農業に関する言葉（農語）や農耕儀礼、天気と作柄などについて『会津農書附録』八巻（現存するのは二、四、六、八巻）をも著述している。『会津農書』は上巻（稲作）、中巻（畑作）、下巻（営農）の三巻からなり、原本は未発見である。寛延元年（1748）写には、100点余りの農具の解説があり、そこには仮名が付されており、当時の農具の名称を垣間見ることができる。また、会津地方には貞享2年や文化4年の風俗帳があり、当時の言葉や民具名称をも見ることができる。

『会津農書』には、当時の仕事着についての記載を見ることができない。『会津歌農書』には、「てゝら」および「手出裸」という記述があり、元禄頃には「てゝら」と呼ぶ仕事着の名称が存在したことがわかる。しかし、その形態等については不明である。「稲守」と呼ぶ乾燥した稲束の監視の記載で、「稲まもる（仮屋）かりやの（とま）苦をもる（漏）露に 賤が手出裸の袖ぞぬれける あはれとて問ふ人もなき秋田守 鹿（鹿）にハ風の音許（ぼゆり）して」とある。「手出裸」の記載は、その他「更衣」、「草ぎる」すなわち草刈にも見ることができる。

「手出裸」は、『会津農書附録』八巻に古歌を交えて若干詳しく記載している。

問て曰、農家にて田圃の務に夏ハてゝらを着て動くといへる者有り。亦てゝれといへる者もあり。此両様の衣類ハ何そや。

答て云、暑気甚しき頃ひ常の帷子（つとめ）を着てハ手足にまとひ付て力かたし。故に長をつめて膝際りに、ゆきをつめて肘限りに仕立るを手出裸といふ。亦為課敢帷子（シハカ）ともいへり。扱てゝれと云ハ下帯の事なるへし、其証左の古哥に見えたり。

夕顔（スズミ）の棚の下なる夕涼ミ

夫は惜犢鼻褌妻ハニ幅して

この記載によると、「手出裸」（てゝら・てゝれ・為課敢帷子（シハカ））は「長をつめて膝際りに、ゆきをつめて肘限りに仕立るを」と、会津地方では「腰切り」とか「短（たけ）」・「半切り」等と呼ばれる上衣の形態を指している。しかし、近年の民俗語彙から「てゝら」の呼称は聞くことができない。『広辞苑』には、「てゝら、①肌着。襦袢。また、膝のあたりまでしかない短い着物。②褌。下帯」とある。「古哥」に紹介されている歌は、豊臣秀吉ゆかりの木下長嘯（ちやうしょうし）子の歌とみられる。「夕顔のさける軒端の下涼み男はてゝら女はふたの物」という歌を、与次右衛門は知っており、「手出裸」の説明に付したものとみられる。「てゝら」と類似する名称は、加賀地方の農書『農事遺書』（宝永6年）にも見ることができる。ここにも木下長嘯子の歌をもとに記載している。「夕涼ミ其儘見ツル賤（ユウスマ）ノ男（マ）がテ（シヅ）レ（ヲ）ノ衣短（コロモミジ）カ夜ノ月。」とあり、その後「帯セズ（オビ）ノ短キノテ（ミジカ）レ（エリ）ノ衽打払ヒ、」と、「短キ」着物と



写真5 『会津農書』著述当時の田植え時の仕事姿 佐瀬与次右衛門、農業指導の図(部分より) 『会津孝子伝』(宝永7年)福島県立博物館蔵



写真6 江戸時代後半の農作業の服装 中野義都著『北郷鄙土産民政要』(宝暦13年)部分 『会津風土記・風俗帳』第3巻より

記載している。

『会津農書』著述当時、「手出裸」と呼ばれるような短い上衣を農民たちが着用していたことは、貞享2年の風俗帳からもわかる。現在の南会津町山口・古町付近(旧南郷・伊南村)の『伊南古町組風俗帳』には、「山なみ」、「農仕帷子」などの名称を見ることができる。「農仕」という名称は、現在も只見地方では仕事着上衣をノーシと呼んでいることに、注目せられる。

一百姓常ノ衣類之事 秋ノ末より春迄之間ハ家なミ山なみと申候而、山なみハひざ切ニ家なみハ常ノ長ケニ横指を拵壺ツ宛着申候、此中入ニハ麻之そかわを水ニひたし打洗なみけと申ニ拵表ニハ古かたびらを当テ横指ニ仕候、是を苧のわたともなみとも申候、夏ハ農仕帷子と申長ケひざ切ニ仕、そでハ弐ツわりニ小ク仕着申候、常之かたびら共ニ着料之分ハ、面々手前ニ而ともよこと申太布を織着申候、

この記載によると、貞享2年当時南会津町山口・古町付近では、「山なみ」・「苧のわた」(「なみ」とも云)・「農仕帷子」と呼ぶ仕事着の他、「家なミ」と呼ぶ普段着の名称が存在したことがわかる。しかし、これらの民俗語彙は現在聞くことができない。麻単衣の上衣をカタビラと呼ぶことは、現在にも継承されてきている。「麻之そかわを水ニひたし打洗なみけと申ニ拵」とある「なみけ」は、苧おのかす(オグソ)である。これを綿として入れたものを、「苧のわた」または「なみ」というとある。「横指に仕候」と刺子の技法が記載されている。猪苗代地方では、これを「おわた」と呼ぶと貞享2年の『猪苗代川東組萬風俗改帳』にある。また、同風俗帳には「女衣類第一おのわたをさし、」と、刺子を行っている光景を記載している。

一なかこ帷子ニ差付候地下之衣類をおわたと申候
是ハ麻切秋曳寒水に浸毎夜女共かわをはぎ取板に当苧ニ仕候、苧かすを石ニあてつちにて打た、きおわたニ入候様ニ仕候をなかこと申候

苧のかすを入れ刺したものを、「おわた」と呼ぶとある。猪苗代地方では、苧かすを入れるように仕立てたものを「なかこ」と呼ぶと記載している。また木綿栽培が普及していなかった当時の南会津地方では、苧かすを綿の代りに入れて着用していた。これが「おわた」である。ヌノジバンとかヌノモモヒキと呼ぶヌノは、一般には麻を指して言う。「布子」といえば、麻の綿入れである。ヌノドンブクと言え、麻の布地に苧グソを入れた綿入れであった。只見地方のオミンノコ、すなわち「御布子」である。文化4年の『塩川組風俗帳』には、「綿入の着物をぬのこと云」とあり、現在の喜多方市塩川町付近には当時ヌノコの名称の存在がうかがえる。

天明8年(1788)に幕府の巡見使に随行して東北各地を巡歴した古川古松軒は、その紀行記『東遊雑記』に只見町布沢付近で「布子」について記載している。

十九日古町発足、三里十四町^{やなどり}染取、三里半布沢^{ふざわ}止宿。この辺別して冷氣強くして、朝夕は各おの^{ぬのこ}布子を着せしなり。(中略)、いずれも単衣^{ひとえ}を着して寒を体^{てい}に見えず、住み馴れしゆえなるべし。

また、貞享2年の『伊南古町組風俗帳』の記載には、「横指二仕」とあるように刺子の技法がある。「横指」は「刺子」と同様のものであることは、貞享2年の現在の南会津町田島付近の『江川庄風俗帳』の記載からもうかがうことができる。「此末ツ(八月)比ヨリ麻ヲ剥、或凡卑ノ賤女、召仕之下女、麻ノ疎皮^粗ヲ水ニ浸シテ川辺ノ石ノ平ナルヲ打盤ニシテ叩キ和ケ、カクテ刺子ノ中ニ用ル」とあり、「刺子」の名称を見ることができる。

南会津町の旧南郷村から只見町にかけての伊南川流域には、ハダッコと呼ぶ刺子の上衣がある。半切^{はんきり}のツツソデ(筒袖)の着物を二枚ほど縫い合せ、破れればつぎはぎをしたので、ボロ刺子などとも呼ばれる。主に朝草刈りなどに着用した。また、最初から麻の葉や七宝などの模様をきれいに刺した刺子がある。袴纏形^{はんてん}のものが多く、サシコハンテンという名称もある。女性が息子や夫のために愛情をこめて刺したもので、娘も年頃になると親より刺し方を教わったという。伊南川の堰上げや建前など共同作業の折、着用したという。

また西会津町奥川地区には、サシコモッコウと呼ばれる刺子の上衣がある。サシコモッコウは冬の仕事の時、下着にシャツを着てその上に着る。さらにアワセハンテンを着て山仕事をする。サシコモッコウは、膝ぐらいまでの裾長に作り刺したものである。

隣接する新潟県東蒲原郡鹿瀬町や上川村(現阿賀町)では、サシコモッコウと呼んでいる。前身頃^{みごろ}と後身頃に杢形や山道・平刺に紺木綿に白糸で刺したもので、破損しやすい袖部は刺さない。鹿瀬地区には腰までのサシコモッコウがある。サシコモッコウはヤモギモンと呼ばれる仕事着を代表するものであった。猪苗代町の会津民俗館には、旧上川村のサシコモッコウが十数点保管されている。サシコモッコウのモッコウの意味については不明である。相馬地方では、ボロ着物のようなものをモッコと呼び、よく「そんなモッコみたいな格好して」と、私は母に叱られたことがある。モッコは、相馬地方では土砂など運ぶ「持籠」を指して呼ぶ場合が多い。

会津若松市東山町湯ノ入地区には、サシコワンバリと呼ぶサシコがある。紺木綿二枚ほど白木綿糸で横刺しに刺したものである。肩部には、柿の花や山道模様を刺したのもあ



写真7 ハダッコ(刺子) 南会津町鶴巣 会津民俗館蔵



写真8 サシコワンバリ 会津若松市東山町湯ノ入 会津民俗館蔵

る。炭焼きなど冬期間の山仕事に着用したものである。ワンバリの呼称については不明である。

3. 風俗帳にみる「猿袴」の出現

宝永6年(1710)の『会津孝子伝』の佐瀬与次右衛門の記載には、与次右衛門の農業指導の図がある。田植えをしている男女の服装には、長裾を尻まくりして田植えをしている農民の姿が描かれ、まだ山袴の着用は見られない。喜多方地方の農業について記載した宝暦13年(1763)の中野義都の『北郷鄙土産憐民政要』に描かれた農民の姿にも、山袴の着用は見ることができない。

会津地方で農民の姿に山袴類の着用が見られるのは、『東遊雑記』の記載で天明8年ごろである。古松軒は猪苗代付近の農民の姿を次のように記載している。

この辺下々国にして、諸品不自由いふばかりなく、蠟燭・漆の外は産物もなく、山方にては婦人踏込み[股引形の山袴]のようなるものを裾短かにはきて、眉毛も剃らず櫛削らず頭は乱髪なり。

「踏込みのようなるもの」すなわち山袴類の下衣を古松軒は見ている。また、南会津町田島にかけての村では、「このたび御巡見使拜見とて婦人の数多く出ずるを見るに、紺の短き振袖を着し、手拭を帽子の如くかぶり、声高からにいい出ずる風俗、」と、農民女性の姿を記載している。これらの記載からも天明8年ごろに会津地方に山袴類の下衣が、農民に着用されていたものと見られる。

会津地方の平坦部の一般的な仕事着姿は、ジバンにサルツパカマと呼ばれる上衣、下衣に分かれたものである。サルツパカマは、サラツパカマやサツパカマとも呼ばれている。会津地方におけるサルツパカマ(山袴類)の出現は、現段階では不詳である。文化4年の現在の喜多方市熊倉付近の風俗帳『熊倉組風俗帳』には、「猿はかま」の記載を見ることができる。隣接する慶徳および熱塩加納町付近の風俗帳にも、「猿袴」の記載があるので、文化4年当時の喜多方市付近ではサルツパカマが着用されていたことがわかる。

一婦人の稼 古は糸はた織、せんたく物杯が重^(主)の稼にて、夏中田畠の草を取り、馬

飼料の朝草蒨田植稲刈までにて鋤など取候、女は一人くらしの後家杯かたまさか取り候事に候所、此三拾年以來段々女とも、鋤を取付畠作るめ物杯致候か、追々一体のならばしになり、近年は婦人の儀男子と同様に罷成り、田打などは女子としてゆひなど致して、凡て農業男子と一同仕業、丈夫成る生れの女は男まさりに働き候者何程も御座候、三拾年以前はさつき支度と申、嫩子は親里へ参り、木綿を貰ひ白地の新単物に黒紫帯上紺の前たれに、手さし、きゃはんを拵へ、五月女と申田植致候所、近年の出立はじばんに猿はかまをはき、髪もたはねす男子同様の姿にて男女の見分けも無御座候、凡て古より諸事華美に罷成候所、此風俗は中昔とは大きに替り申候、さつき用意の名義はまたすたらず、田植前に姫子が里へ参候事間々見え申候

この記載によると、文化4年に近い年代に会津地方平坦部の一般的な仕事着姿のジバンにサルッパカマ姿が出現していたことがうかがえる。「近年の出立はじばんに猿はかまをはき」とある点は、注目すべきであろう。「猿はかま」に相当するものとして、前述の文化4年『大谷組風俗帳』の、「大雪にて通路難」成時はがんじきをはく、また雪はかまと



写真9 女性の仕事姿(西会津町宝坂) 菅笠、手拭、ジバン、長こて、ヤマオビ、サルッパカマ、雨蓑、地下たび 昭和42年撮影



写真10 男性の仕事着姿(只見町小林) 手拭、シゴトシ、ヤマオビ、カリアゲユッコギ(サルッパカマ)、ゾウリ 平成3年撮影



写真11 ヤマジバン 木綿、女性用(猪苗代町三城湯) 会津民俗館蔵



写真12 サルッパカマ 木綿、男性用(猪苗代町三城湯) 会津民俗館蔵

云を着て自由仕候、」とある、「雪はかま」とみられる。「雪はかま」という呼称は、現在の民俗語彙には聞くことができない。しかし、三島町に隣接する金山町から南会津郡只見町にかけては、ユッコギ・カリアゲユッコギ・ブタユッコギ等、ユッコギすなわち「雪こぎ」に通じる名称が存在する。新潟県に接する深雪地方で聞かれる名称である。大沼郡から南会津郡地方、すなわち会津山間地方の文化4年の風俗帳には「猿袴」の記述は見ることができない。

なお文化4年の『熊倉組風俗帳』には、「たち」という名称の存在がある。「一雑股引をたちと云」とあり、「雑股引」は旅行などの股引に対し、仕事用の意味で「雑」という表記になったのであろうか。他地方では「外股引」という表記もある。大沼郡昭和村などでは、昭和20年代までヌノモモヒキと呼ぶ麻の股引が着用してきた。「雑股引」をザツと呼んだか、ゾウと呼んだかも注目される。

文化4年の『五目組風俗帳』の記載は、当時の仕事着を簡潔に示している。「一作人田畠江出候時は、男女とも二半切布子袴とも二膝之上_{二面}切候服を着袴を着申候」とあり、「半切」の形態も示し、ジバン・サルッパカマの仕事着姿の出現を示している。このように風俗帳等の記録からみると、会津地方の一般的な仕事着の姿は、18世紀末から19世紀初頭にかけて出現したものとみられる。

4. 地域差にみる山袴の名称

宮本勢助氏によると、「山袴」は袴の一種で、現在広く正装に際して着用される^{まちだかほかま}襠高袴(座敷袴)に対して、地方農山村などで日常生活のため、また農耕その他の作業のために、着用している一群の地方的な袴の総称である(宮本勢助著『山袴の話』大日本連合青年団昭和12年)。

会津地方の大沼郡三島町から金山町にかけての地域では、田畑を一般にヤマと呼び、野良仕事に着用する仕事着をヤマキモン(山着物)・ヤマジバン(山襦袢)と呼ぶ。またサルッパカマを単にハカマとも呼び(喜多方市塩川町など)、そこにヤマがついてヤマバカマと呼ぶ場合もある。民俗学では「山袴」と位置づけているが、会津地方にはヤマバカマの名称も聞かれる。

宮本氏が山袴の着用場を、日常生活すなわち普段着と仕事着とに分類しているが、会津地方の場合は前者にモンペ・フンゴミ・ユッコギなどの名称があり、後者にサルッパカマ・カリアゲユッコギなど、地域により多様である。仕事着を例にとると、会津平坦部ではサルッパカマ系の名称があり、山間部ではユッコギ系の名称が存在する。

大沼郡金山町付近がサルッパカマとユッコギの名称が混在する地域である。人によってサルッパカマと言ったり、ユッコギと言ったりする。只見川の上流域の只見町に入ると、集落ごとに微妙に名称が違って来る。すなわち、金山町川口を境に積雪の量が大きく違って来る。只見川上流に向ってユッコギ系の名称が多くなり、サルッパカマ系の名称は消滅していく。反対に下流の三島町ではユッコギ系の名称は聞かれない。

只見町は747km²という広大な面積を有するため、町内でも山袴類の名称に変化が見られる。町内で金山町に隣接する塩沢では、カリアガリサッパカマと呼んでいる。この名称は塩沢・十島集落で止まる。カリアガリまたはカリアゲという名称の由来や意味について

は不明である。臍部^{すね}で急に細くなっているために生まれたものであろうか。上流の隣集落の蒲生では、ホソツパカマ・カリアガリホソツパカマという「細袴」系の名称がある。その上流の只見地方では、カリアガリホソツパカマ・ホソツパカマの名称がある。只見地区で分流する伊南川域の朝日地区に入ると、ホソユッコギ系の名称が主である。その上流の明和地区から南会津町旧南郷村にかけては、カリアガリユッコギが主である。伊南川上流の檜枝岐村では、ホソツパカマとなり、カリアガリユッコギの名称が聞かれない。

柳田國男監修『日本総合民俗語彙』によると「ユッコギ 新潟県から長野県北部にかけて用いられる雪袴の名称。ユッコギ・エッコギ・イッコギなどと発音される。」とある。同書には、「ヨッコギ 雪漕ぎの訛語。長野県の雪袴の名。北安曇郡のは必ず麻布製で、普通の雪袴より襠^{まち}が高く裾細である。」とある。会津地方のユッコギも、新潟県から長野県にかけての「雪漕ぎ」系の呼称と関連したものともみられる。

只見町明和地区から南会津町旧南郷村の伊南川流域では、屋内で履く下衣をユッコギと呼ぶ。冬の普段着には裾長のワタイレ（綿入）またはオミンノコと呼ぶ綿入を着用する。ワタイレの裾部をおおうように、股の部分の太く大きく作ったユッコギをブタユッコギとかダフユッコギと呼んでいる。ブタとかダフという名称は、大きいとか太い意で用いている。麻製のものもあり、膝部には井桁や曲金の模様にしたものもある。南会津町木伏では、昭和15年ごろからモンペを履くようになり、ユッコギは徐々に姿を消していったという。ユッコギまたはブタユッコギに相当するものが、大沼郡昭和村などではフンゴミとかフグミ、すなわち「踏込」系の下衣である。紺木綿で作る場合が多い。

ユッコギという名称は、仕事着と普段着とに混用されている。ユッコギが「雪漕ぎ」に起因する言葉であることは、その分布が深雪地方に存在することからもわかる。ユッコギが仕事着として着用する以前に、「雪袴」として深雪の歩行または雪踏み等に用いられていたことも推測される。文化4年の『大谷組風俗帳』などにみるカンジキを付けて歩く時に「雪はかま」（雪袴）を履く記載がある。文化4年になると、『熊倉組風俗帳』にみるように「猿袴」が着用されている。「雪はかま」は仕事着としての只見地方などのカリアガリユッコギともみられる。しかし、貞享2年『猪苗代川東組萬風俗改帳』の「ゆいうみ」の記載には、「毎年秋諸作取納候後、雪はかまぬの急而布出来候ためニ、女共拾人余寄合、」とあり、「雪はかま」という名称が当時存在していたことがわかる。仕事着としてでなく、普段着としての山袴であろうか。貞享2年の風俗帳には、下衣の記載はほとんど見ることができない。

前述したように、「猿袴」が会津地方で着用されるようになったのは、文化4年の風俗帳によると18世紀末後半からである。現在まで継承されてきたサルツパカマ・サツパカマという名称も、導入とともに伝播したものと考えられる。宮本勢助氏の研究によると建久10年（1200）の『明月記』に「猿袴」の記述があるという。どのような形態が不明であるが、言葉としてはかなり古いものである。宮本氏は、「ヤマバカマには、サルと云ふ語を被らせたものが尠くなくない。例へば、サルバカマ、サルツパカマ、サツパカマ・サルコバカマ、サルモンペ、サルコモンペ…略…」と例をあげ、「現在サバカマと関係の有るらしいサツパカマと云ふ語が、羽後国由利郡直根村百宅や、岩代国北会津郡金上村にある。サバカマはサゴロモ（狭衣）の語に対すべきもので、民間のハカマは早くサバカマと

表襦袢・北山)、ヤマジバン(山襦袢・大塩)、単にジバン(襦袢・桧原)などと、仕事着の呼称が総称になっている。大塩では田畑が少ないので、田畑に行くにも「ヤマ(山)に行く」と言い、ヤマジバンがその名称となっている。北山と大塩は、平坦部から山間部にかける地域で、仕事着の一般的名称はジバンにサッパカマである。山間部の桧原になると、ジバンにサッパカマである。桧原地区では、木地業に追われ、着替える暇もなく、仕事着と普段着との区別もなく、常にジバンにモンペ姿の労働者姿であったという。桧原地区でも第二次大戦後の木地業の廃業に伴い、農業に転業してからは大塩・北山地区と同様にサッパカマが着用されるようになったという。

会津地方の山袴の名称で注目すべきものに、耶麻郡西会津町奥川地区のタスケと大沼郡昭和村野尻地区のカルサンがある。これからは、会津地方ではこの地区のみ存在する名称である。タスケは、タチツケとかタツツケと呼ばれ膝の下の所で足にくくりつける形態のものに関連するのであろうか。形態は西会津地方でいうサッパカマとほとんど形態は変わっていない。

一方、カルサンは野尻地区に局地的に存在し、他の昭和村の村々ではサルッパカマと呼んでいる。昭和村大芦はヌノサッパカマ・ヌノモモヒキなどと呼び、麻製のものが遅くまで着用されてきた。カルサンという呼称は、阿武隈山地の田村市旧船引町や旧大越町などで広く呼ばれている。明治末期ごろまではカルサンが一般的に着用されてきた。大正になりモンペが普及してきたという。タスケやカルサンなどの名称が局地的に存在するのか、不明である。

宮本勢助氏も、「タチツケとかカラサンとか云ふものは、一寸考へると其型式は極めて明瞭であるらしく思はれるが、実は極めて不明瞭なのである。」と、会津地方の山袴の名称の諸相を示すような指摘をされている。

普段着として屋内ではく下衣は、モンペが会津で広く着用されてきている。第二次世界大戦中は、婦女子は全国的にモンペが着用され、山袴の代名詞のようになっている。西会津町でモンペが普及し始めたのは、明治末から大正初期ごろにかけてである。モンペがどこから入ってきたのか、西会津町でも不明であるが、町内では平野部より流行し、山間部の村々へ広まっていったという。モンペが普及する以前は、女の方は冬でも裾長の着物にマエダレをしており、キャハンを着ける人もあったという。また、サルッパカマをモンペがわりに着用する人も多かったという。モンペは赤縞の普段着のものと、よそゆき用に紺木綿で作ったものがある。「花嫁モンペ」と呼び、嫁入りの時に婚家へ入ったという。宮本勢助氏は、昭和9年の調査で現在の喜多方市塩川町姥堂のサルッパカマとモンペの裁ち方と計測図を『山袴の話』に掲載している。

モンペという言葉は全国的に普及しているが、宮本勢助氏の研究によると「股引」に由来するものとみられる。寛政から天保(1789～1843)にかけての津軽地方の『奥民図彙』にも、山袴をはいた女性が描かれており、「モッヘヲ着ル男女トモに同シ。」と説明が付され、男女ともに「モッヘ」と呼ぶ山袴を着用している。モンペの語源について、宮本勢助氏の研究により立証されている観がある。

此モッペ及びモッペイの語に比較されるのは、倭訓栞にある安房国のモッペイと云

ふ語である。又モーへの語に比較されるのは、上総国誌に見えた上総のモオヒイと云ふ語である。安房のモッピイ及び上総のモオヒイは共に股引の方言であった。羽後の男鹿半島や仙北郡でモッペと云ふのは股引のことである。又荘内地方や飛鳥でモンペ、陸中鹿角郡でモンベと云ふのも共に股引のことである。以上に拠るとモンペイの語が、モモヒキの語から変化したものであることは略明瞭であると考へる。

5. 外套類、被り物の名称

雨や雪時の作業には、蓑笠を身に着け働く。『会津歌農書』下之末の農具の項では、当時の蓑笠について次のように詠んでいる。

五月乙女の草ころもの衣(鎧)の雨のよろゐ
 ゑりミのすぐなれハつり蓑といふ
 土子とねの着る草の衣ゑりハ
 輪わ(組)くミしゆへに廻し蓑とぞ
 賤しづめの女が田植にかつく雨のよろゐ
 是を五月に乙女笠といふなり

田植えをする女性（五月乙女）は、「つり蓑」又は「釣蓑つりミの女の雨衣」に「五月乙女笠」とも呼ばれる「菅笠すげがさ」を被るとある。「土子とね」すなわち田植え時の準備をする男性は、「廻し蓑」又は「廻蓑まいしみの男ノ雨衣」を着用する。『会津農書』下巻の「農人郷談」によると、「土子とね」は、「舎人トネ 田植時男。」とある。

寛延元年（1748）の『会津農書』写の農具の記載には、蓑笠について次のようにある。

蓑——ミノ雨衣。男ハ廻し蓑荷摺ツルミノに用。女ハ弦蓑。藁を以作る。又菅ニても作る。
 笠——雨鎧スゲ。菅を以作る。

蓑は「又菅ニても作る。」とあり、これはヒロロとかヒロラと呼ばれるミヤマカンズゲで作っていることを指しているとみられる。ヒロロという呼称は南会津地方で、ヒロラは喜多方市など会津北部地方で呼ばれている。ヒロロでは蓑の他、カンゼンブシ・ゲンベイなどの被り物やはきもの、背負籠などの材料にも用いられる。また、「廻し蓑荷摺に用。」とあるように、蓑での背負い運搬の機能も記述している。只見町ではネコミノなどと呼び、亀甲や菱、家印や「寿」の文字などを織りこんできれいに作ったものもある。ネコミノは、シナ皮でじょうぶに作ったものもある。

蓑は、『会津歌農書』下之末「農具 調始とへのはしめ」には、「正月の内にわら蓑ミのつくりてハ 農病のうやミするとなへこそすれ」と詠れ、正月のうちに作ることを嫌っていた。寛延元年の『会津農書』写にも、「蓑ミノにては正月之内造レハ悪病すると云て二月ニ入て造ル。」とある。これらの伝承は、現在聞くことができず、その理由についても不明である。また、「廻し蓑」と「弦蓑ツルミノ」の名称も確認できない。

天明8年の古川古松軒の『東遊雑記』には、只見町梁取から布沢付近にかけて、人足に

でた農夫の姿を記載し、そこには簡単な蓑の絵を描いている。その解説には、「^(蓑) 山菅 というものにて作り雨もることなし」とある。只見町であれば、「菅」はヒロロとみられる。

人足に出でし所のものを見るに、画ける桃太郎が島渡りを見るように、米団子を丸焼きにして、それを七つも八つも細袋に入れ腰にさげ、短き^{みの}蓑を着し、長き鎌を横たえ、さしも嶮しき棧道を、もののかずとも思わぬ^{てい}体にて走り廻る有様、誠に男々しく見えたり。(中略) いかほど重き荷物にても、背負うのみにて^{にな}荷うことならず、(以下略)

人足の男たちが身に着けていた「短かき蓑」は、雨蓑と荷背負蓑とを兼ねたネコミノとみられる。蓑の材料は主に藁やヒロロであるが、猪苗代湖畔ではクグを材料としたクグミノを製作していたことを、文化6年(1809)の『新編会津風土記』に記載している。会津若松市湊町崎川付近の原組の記載によると、「能隙ニハ『クク』ト云草ヲ採り、蓑ヲ製シテ府下及ビ他邦ニ鬻出シ、」とあり、販売もしていたようである。クグは、太平洋沿岸など沿岸の湿地帯に多く植生し、私の実家の南相馬市鹿島区南海老などでも作っており、私は昭和50年ごろ製作したクグ蓑を所持している。

蓑のように頭から肩・背までをおおう、只見町ではカンゼンブシと呼ばれ、ヒロロや藁・山菅で作られたものがある。大沼郡昭和村ではカンゼンミノと呼んでいる。カンゼンブシのブシは「帽子」に由来するものであろう。カンゼンについては不明である。郡山市湖南町の猪苗代湖南地方では、「雪んぼうし」と呼んでいる。『北越雪譜』の「雪中歩行用具」には、「わらぼうし」と図を添えて記載している。カンゼンブシには腰切までの長いものと、肩あたりまでの短いものがある。前者は雪中の歩行に、後者は雪中の仕事に用いた。只見地方では、毛布型のカクマキ(角巻)が普及すると、カンゼンブシは除々に見られなくなったという。

只見町や南会津町(旧南郷村)の伊南川流域のヤタッタと呼ばれる湿田の田起こしには、蓑に形態が似たタウナイマエカケ(田うない前掛)を胸から腰部にかけて着用した。山ブドウの皮やヒロロ・藁などで作ったものである。腰部にのみ装着するものもある。寛延元年の『会津農書』写には、「前掛——田搔時尻耙を取、泥除に前ニかける具。わらを以つくる也。」とあり、代搔きに使用すると記載されている。また、『北越雪譜』には、「むねあて」と記載されている。図まで添えられており、雪中歩行用具にもなっている。

シナ皮とて^{みやま}深山にある木の皮にて作る、寸尺は身に応じ作る。大かたはたて二尺三寸、はば二尺ばかりなり。胸^{むね}あてともいふ。前より吹つくる雪をふせぐために用ふ、農業には常にも用ふ。他国にもあるなり。

農作業に欠かせないかぶり物に、テヌグイ(手拭)がある。特に女性は多く使用する。会津地方では、フタバテヌグイ(二幅手拭)とかフタスジテヌグイ(二筋手拭)と呼び、テヌグイ二枚を中ほどで縫い合せたものがある。一枚目を頭にかぶり、二枚目を首に巻くようにする。フタスジテヌグイを被った上に菅笠や編笠を被る。これは大正時代になって

から、会津平坦部で普及し、戦後は山間部へ流行し、昭和30年代には只見地方でも被られるようになった。普及し始めのころは、テヌグイ二枚を使い、もったいないと嫁は姑から戒められたという。

冬期間は男女ともテヌグイを包みこむように被る。いわゆる「^{ほおつかぶ}頬被り」である。会津では、スッポカブリ等とも呼んでいる。そのためか、文化四年の『大谷組風俗帳』の「常の言葉」には、「一手ぬくいをすつほうト云」とある。スッポカブリという動作から、テヌグイを「すつほう」と呼ぶようになったのか注目すべきである。近世の史料に、テヌグイが記載されているのもまれである。同風俗帳には、「一笠を雨ふたとも云」とある。『会津歌農書』に蓑を、^(籠)「雨よろぬ」と呼んでいるのと、対象的である。

北塩原村大塩から北山にかけて、ニゾウと呼ばれる藁やガマ（蒲）で編んだ被り物がある。ゴザ製で九官鳥の頭のような形に、後頭部側にカスリなどの木綿布を垂らすように付けたものである。山形県米沢地方や村山地方で多く被られ、東村山郡中山町ではナタギリと呼んでいる。福島市周辺でもニゾウと呼び、山形県に隣接する地域に分布している。主に陽除けに被られていた。ニゾウは会津地方では、北塩原村にのみ使用されていた。他地域の事例からみて、山形県より伝播したものであろう。ニゾウという名称の由来については、不明である。山仕事や野良仕事に被られた。

6. はきもの類の名称

会津地方における農作業および山仕事時のはきものは、雪のない季節にはアシナカ・アシダカ、ワラジで、雪のある季節にはヤマゲンベイ・オソフキワラジ、フカグツなどである。その他、ハバキやシブッカラミなどの副装品もある。外出用または屋内ではきもの、正月や婚礼など普段および晴のはきものについて、作業用と作り方や装飾に若干の相違が見られる。

まず、『会津農書』上巻の藁細工に必要な藁の量についての記載について見てみよう。

^(すぐり)勝藁壺把^{二面}四斗俵の結なわ五拾尋有。又^(なう)綱とも云。

同、馬の沓三足搔。

同、^{ワラヂ}藁履地ハ五足、乳立ハ六足作るべし。

同、^{サツカケ(グツ)}指懸履三足、あく^(草履)と組二足作る。

同、そふり六足作なり。

この記載では、労働時のはきものを書きあげたものでなく、製作に必要な藁の量を日常多く製作するものを選んで記載している。「馬の沓」はウマノクツと呼ばれるもので、蹄鉄以前に馬の爪を保護するために履かせたものである。「^{ワラヂ}藁履地」はワラジ（草鞋）で旅行または草刈り、山仕事などに多く利用する。

「乳立」は不明である。「^{ワラヂ}藁履地」と並記され、それよりも一足多く作られるところから、アシナカと推測したい。「乳立」という表記に注目し、アシナカの緒は爪先の方で結び目を作り、緒を立てる。「乳」は幟や旗のように棒を通す輪状のものも呼び、出ている形を指すと見れば、アシナカの緒の結び目が上にでているところから、「乳立」と表記したの

ではないか。現在の会津地方で、「乳立」という語彙および民具は聞かれない。

ワラジと組に着用するものにオソフキがある。これは藁で簀編みにしたものを爪先に付けるものである。一種の爪掛である。ワラジと一緒に付けて、オソフキワラジと呼んでいる。オソフキワラジは、秋から春にかけての冬季間、あまり積雪のない時の作業に用いる。オソフキは弧状に爪先を覆うように作るのが一般的であるが、只見地方では二又に爪先が分かれたものもある。この形態は、ツマガケ（爪掛）といって布を合せ刺したものと同形である。これを踵まで伸ばして作れば足袋になり、サシタビ（刺足袋）といって細かく麻や木綿糸で刺して作る。これを履いてワラジを履く。藁のオソフキから刺子のツマガケ・サシタビへの変遷がうかがえる。

オソフキについての記載は少なく、文化4年の現在の喜多方市熱塩加納町付近の『五日組風俗帳』にカンジキを使用する時の方法に見ることができる。「右かんぢきハ熊柳を用ゆ、形ヲは世に多く用る所なれども、図の如く拵使而おそふきの下左右江結附ケ雪のぬからぬ様ニ仕候」とある。

「指懸履^{サンカケ(グツ)}」は、いわゆる突っ掛けぞうりである。只見地方ではワラグツ、猪苗代地方ではグツ、またはグツなどと呼び、雪中の村内の歩行などに履く。只見地方では祝言や葬式の時にも履くという。『北越雪譜』には、「藁沓」また「別のわらくつ」とあり、その製作方法と図まで記載されている。只見地方で祝言に履くのは、『北越雪語』でいう「上品なる」ものであろう。

藁ひとたけにてあみたつる。はじめはわらのもとを丸けてあみはじめ、末にいたりてわらをまし二筋にわけ折かへし、をはりはまん中にて結びとむる。これ雪中第一のはきもの也。童もこれをはく也。上品なるはあみはじめに白紙を用ひ、ふむ所にたゝみのおもてを切り入る。

また、「あく^{かかと}と組」は会津地方で広く履かれていたゲンベイと呼ばれる浅靴であろう。「あく^{かかと}と」すなわち踵があるものである。『北越雪譜』には、「わらくつ」とあり図も添えられている。それには縄のような紐が付いている。会津地方で雪中の仕事に履く、ヤマゲンベイとみられる。雪中での労働のため、ヤマゲンベイがぬげないように縄で足にしばりつけるものである。村内の歩行や通学に履くのを、単にゲンベイと呼んでいるのに対して、労働時に履くのをヤマゲンベイと呼ぶ。ゲンベイはゲンベйкаタと呼ばれる木型に藁を編みこんで作っていく。只見地方ではゲンベイを作ることをゲンベйкаキと呼んでいる。『会津農書』に「馬の沓三足搔」とあるところから、カキは「搔き」という動作を意味している。ゲンベイの爪先をハナと呼び、製作には最も技術を要し、ハナカキと呼んでいる。ヤマゲンベイは簀編みにするが、正月ゲンベイとか花嫁ゲンベイと呼ばれるものは、布を織り込んだりしてきれいに作る。

ゲンベイという名称の由来は、現在不明である。記録では、文化4年の『大谷組風俗帳』に、「一雪履をげんべいと云」とある。会津地方でいつごろからゲンベイが使用されていたかは不明である。現在の会津若松市北会津町中荒井付近の寛文5年（1665）の『萬改帳大沼郡中荒井組』によると、「草鞋」や「沓」・「筵」とともに「ゲンベイ」の製作を営

みとしていたことが、数ヶ村の書上げに見られる。東麻生村の記載には、「クツ」もあり、『会津農書』に記載された「指懸履^{サツカケ(クツ)}」とみられる。「一大抵此ノ村ノ菅、クツ、ゲンベイ、草鞋、紅花金三両程ニ賣ル、年ニヨリ増減アリ」と、これらの売り上げは年貢の足しにしたとみられる。若松城下に近い村だからこそ、こうした営みがあったようである。仕事時にゲンベイを履くときは、カカトガケとかアシマキ・シブツカラミと呼ばれるものを、足の甲部・足首部に巻く。横長状の木綿布二枚ほど合せ、木綿糸や麻糸で細かく刺したもので、両端に紐を付ける。また踵をつけたもので、爪先が出る形態のものもある。

『北越雪譜』には、「志ぶからみ」とあり解説と図が添えられている。図や解説から見ると、藁製で、只見地方の二又に分かれたツマガケ（爪掛）型のオソフキによく似ている。

シブカラミはあみはじめの方を踵^{きびす}へあて、左右のわらを足頸^{あしくび}へからみて作るなり。里俗^{くづ}わら屑のやはらかなるをシビといふ。このシビにて作り、足にからみはくゆゑに、シビカラミといふべきをシブカラミと訛^{なま}りいふなり。

このシブカラミの名称の由来は説得力があるもので、南会津地方のシブツカラミの名称の由来を説くにも注目すべき資料である。只見町に『北越雪譜』の図に描かれたものと同形のオソフキが存在することも、シブすなわちシビ（「わら屑^{くづ}のやはらかなるもの」）の訛りとする説明に一致する。南会津地方では藁から刺子布に変遷しても、シブツカラミという名称が継承されていることがうかがえる。

昔話の「藁しべ長者」の「しべ」は、「稽^{しべ}」でミゴとも呼び、稲藁の穂の部分だけで、藁の最上質である。秋田県大仙市太田町では爪掛^{つまがけ}の付いた草履をシベといい、同種のを弘前市ではシベゾウリ、山形県河北町ではジンベゾウリ、新潟県南魚沼市旧六日町ではスッベゾウリなどと呼んでいる。また山形県小国町や米沢市、新潟県新発田市などのジンベ・ジンベイは藁の浅沓である。ジンベイは福島県浜通りの相馬地方でも、藁の浅沓を指して呼んでいる。会津地方のゲンベイの呼称については不明であるが、ジンベイ等との関連もみられる。石川県輪島市では爪掛を付けた草履をゾンベと呼んでいる。これらはシビからの訛りから生れた呼称である。会津地方のゲンベイも、輪島地方のゾンベに語韻の響きが似ている。

ゲンベイの藁の浅沓に対し、フカグツと呼ばれる深沓がある。会津平坦部では底部から編み上げて作るのに対し、只見町梁取地区のようにゲンベイにハバキを付けたように作るものもある。梁取ではゲンベイハバキと呼んでいる。「梁取ゲンベイに下山ハバキ」とも言われるほど、梁取地区はゲンベイ作りが盛んであったという。下山は南会津町旧南郷村で、梁取の隣村である。また、金山町に接する只見町叶津ではフカグツゲンベイと呼び、底部から編み上げていく方法である。只見町の東西の位置にある両村では、その製作方法と名称にも差がある。叶津のフカグツゲンベイは会津平坦部と製作方法が似ている。一方、梁取のゲンベイハバキのように、浅沓とハバキを合体した形態は長野県栄村などにもあるという。『北越雪譜』には「深沓^{ふかぐつ}」とあり、その図からは梁取のゲンベイハバキと似ているようである。梁取のゲンベイハバキは、ゲンベイの部分は藁で、ハバキの部分はガバ（蒲）で作ったものが多いと見られる。

ハバキ（脛巾）は、藁やガマのほかヤマブドウ皮・シナ皮など、さまざまな材料を用いて作る。農作業・山仕事除雪作業など脛部を保護する意味でも、雪国には欠かせないものである。『会津歌農書』下之末の農具の項には、「藁脛巾」と記載されている。寛延元年の『会津農書』写には、「^{（ハバキ）}脛巾——農夫の脛に当る具。わらをもって作ル。」とある。『北越雪譜』には、「ハツハキ」とあり図とともに次のように説明している。

ハツハキといふは^{りぞく}里俗のとなへなり。すなはち^{はゞき}裏脚なり。わらのぬきこあるひは^{がま}蒲にても作る。雪中にはかならず用ふ。やまかせぎは常にも用ふ。作りやう図を見て大略を知るべし。やすくいへばわらのきやはんなり。わらは寒をふせぐものゆゑ、雪のはきもの大かたはわらにて作るなり。



写真13 只見地方の雪中のはきもの『図説 会津只見の民具』より

写真14 只見地方のヤマゲンベイとハバキ『図説 会津只見の民具』より

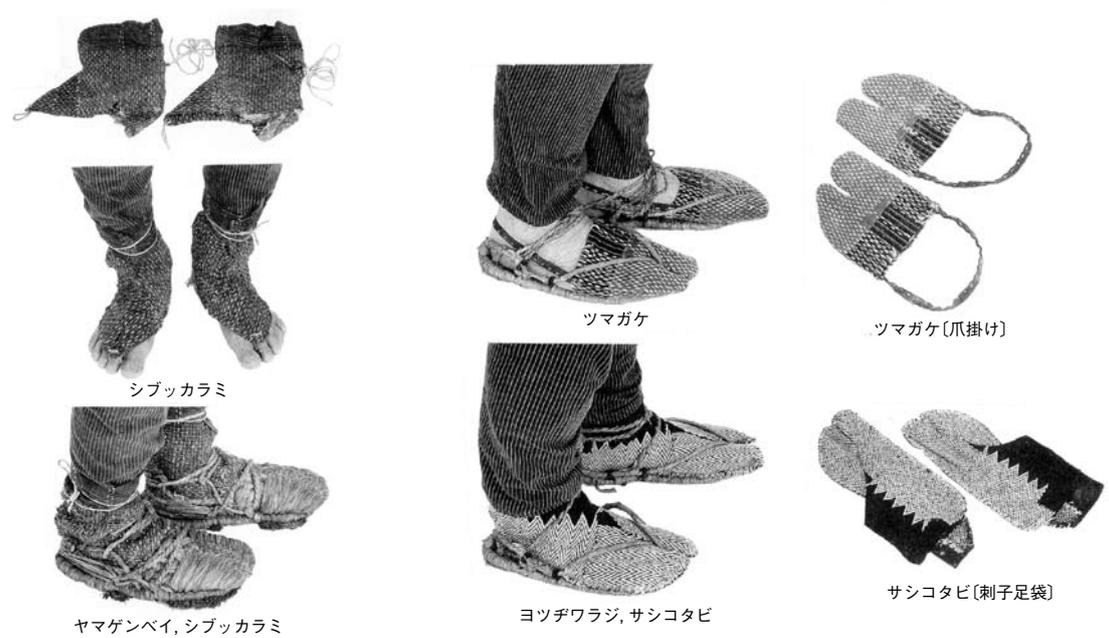


写真15 只見地方のシブッカラムとヤマゲンベイ『図説 会津只見の民具』より

写真16 只見地方のツマガケとサシコタビ『図説 会津只見の民具』より

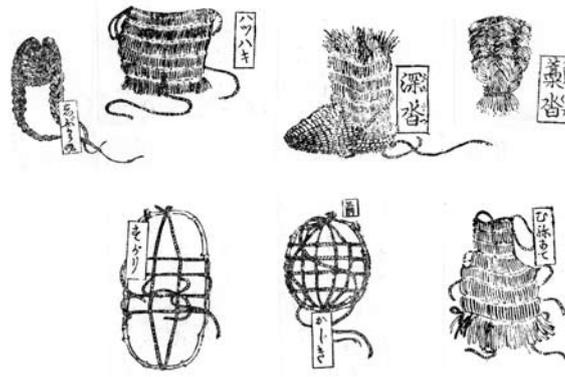


写真17 『北越雪譜』に記載された「雪中歩行の用具」 『日本庶民生活史料集成』第9巻より

「ハツハキ」は、「わらのきやはん」とあるように、布の脛あてをキャハンと呼び、これは道中などに主に用いた。文化4年の『熊倉組風俗帳』には、「猿はかま」を着用する前の時代は、嫁は実家に行きキャハンやマエダレを作ったとある。文化4年から30年以前であるから天明年間の頃である。「三拾年以前はさつき仕度と申、姫子は親里へ参り、木綿を貫ひ白地の新単物に黒紫帯上紺の前たれに、手さし、きやはんを拵へ、五月女と申田植致候所、」とある。「猿はかま」を着用する以前は、田植えに「きやはん」を巻いて田に入っていたことがわかる。

結びにかえて

以上、会津地方における仕事着の名称を、山袴を中心に概観した。会津という広大な面積では仕事着の名称にも様々な相違が見られる。その一つに豪雪地帯の奥会津とも呼ばれる南会津郡と大沼郡の山間地方、会津盆地の平坦部では降雪の状況によりユッコギ系とサルッパカマ系の名称が分布することが確認される。一方でタスケやカルサン等、局地的に見られる名称の存在も確認された。これらの由来については不詳である。

また、『会津農書』や近世の風土記・風俗帳などの記載から、仕事着の名称の存在を確認することができた。「猿袴」のようにある時代に出現した仕事着の着用により、服装の変化、そして習俗の変化などがあったことがわかる。一方で、『北越雪譜』などの近世の記録から不明の民具名称の由来についてヒントを得ることができた。シブッカラムはその一例である。

新潟県や長野県と自然環境が似た会津地方の民具を見た場合、その名称には関連する例が多々あろうかと思う。本稿では仕事着を一例に、民具名称のなりたちや変遷、近世における名称の存在等について模索的に考察したもので、推測の域を脱しきれない点が多々あった。今後、こうした反省を踏まえながら、生産・生業、衣・食・住などの民具名称について、各地の民具と照合しながら、民具名称の共通項目の策定に努めていきたい。

本稿は、平成23年2月18日および3月18日の神奈川大学国際常民文化研究機構、「民具の名称に関する基礎的研究」班での発表の一部をまとめたものである。発表においては、共同研究員諸氏の御教導に感謝する次第である。発表を中心として構成したため、口述筆記的な形になっている点をお許しいただき、御叱正・御教示賜りたい。

参考・引用文献

- 日本農書全集第19巻『会津農書・会津農書附録』農山漁村文化協会 1982
- 日本農書全集第20巻『会津歌農書・幕内農業記』農山漁村文化協会 1982
- 日本農書全集第1巻『耕作嘯・奥民凶彙・疋農置土産他』農山漁村文化協会 1977
- 日本農書全集第5巻『農事遺書・耕作早指南種稽歌他』農山漁村文化協会 1977
- 庄司吉之助編『会津風土記・風俗帳』第1巻寛文風俗帳 歴史春秋社 1979
- 庄司吉之助編『会津風土記・風俗帳』第2巻貞享風俗帳 歴史春秋社 1979
- 庄司吉之助編『会津風土記・風俗帳』第3巻文化風俗帳 歴史春秋社 1980
- 丸井佳寿子監修『新編会津風土記』第2巻 歴史春秋社 2000
- 鈴木牧之『北越雪譜』『日本庶民生活史料集成』第9巻 三一書房 1969
- 森雪扇「会津孝子伝」福島県立博物館蔵
- 古川古松軒『東遊雑記』（東洋文庫版）平凡社 1964
- 宮本勢助『山袴の話』大日本連合青年団 1937
- 柳田国男監修 日本民俗学研究所編『改訂総合日本民俗語彙』平凡社 1955
- 長谷川吉次「会津農書の写本——佐々木本と角田本について——」『農書を読む』第5号 農書を読む会 1983
- 新村出編『広辞苑』第3版 岩波書店 1986
- 只見町教育委員会編『図説 会津只見の民具』只見町 1993
- 佐々木長生『『会津農書』にみる仕事着』『民具マンスリー』第44巻9号 神奈川大学日本常民文化研究所 2011
- 佐々木長生「会津地方における山袴の呼称について」『会津の民俗』第31号 会津民俗研究会 2001